

LIBRARY NEWS

特別号
2015.10

—巻頭言—

図書館運営委員
言語聴覚学専攻

馬屋原 邦博

本から本へ。

学生の皆さん、第3回読書感想文コンクールへの投稿ありがとうございました。今回は自由課題本も取り入れたこともあったためか、10本もの応募がありました。昨年までの応募数を上回ったうえに、読まれた本もいろいろで、今までになく多彩な本の感想文を審査させていただきました。入賞されたかた、おめでとうございます。惜しくも入賞を逃したかた、来年度はぜひ入賞を目指してください。また、今年は出しそびれたかたも来年はふるって応募してください。

さて、1冊の本を読み終えて、次の本を選ぶときに、私はついつい同じ作者や同じ分野、系統の本を探してしまいます。今読み終えたその本の巻末にある著作一覧、広告代わりのシリーズ本の目録から面白そうな本を探し、あるいはその本の引用参考文献一覧が巻末にあれば、それらを手がかりにして読みたい本を探します。欲張って何冊も買って、積ん読になってしまい、学生時代に買った本が未だに読まれずに何十年も自宅の本棚に眠っているのも相当数ありますが、、、。

ところで、本を読むことは、新たな物語に触れることによって新たな感動を経験したり、新しい知識や情報を得たり、新たな発見をすることになりますが、そうやって自分が触れられる範囲だけで本を選んでいては、本の情報もせまく限られたものになってくるでしょう。他の人から薦められて読む本は、自分だけでは知り得なかった新たな物語や感動、知識を与えてくれます。

最後に蛇足ながら、毎年1冊ずつ課題図書の中には、実は私のおススメ本も含まれているのですけれども、2年前の第1回におススメした本は、複数の方がそれを選んで読んでくださいました。有川浩の『レインツリーの国』という本で、こんど映画になるようですので、興味のあるかたは原作本も読んでみてください。



第3回 読書感想文コンクール選考結果

■最優秀賞(1名)

言語聴覚学専攻 4年 中村 優 さん
「奇跡の脳」

■図書館長賞(1名)

作業療法学専攻 2年 森口 優海 さん
「夢よ、僕より速く走れ」

■優秀賞(2名)

作業療法学専攻 1年 中川 舞香 さん
「だいじょうぶ3組」

作業療法学専攻 1年 末永 幸子 さん
「OHANA(家族)奇跡の明日を信じて」

■佳作(2名)

作業療法学専攻 1年 北山 千晶 さん
「こんな夜更けにバナナかよ」

言語聴覚学専攻 1年 牛造 香琳 さん
「重い障害を生きるということ」



本学図書館では「日本語力向上」、「病気・高齢者・障がい者が執筆した本を読むことによって対象者を深く理解する」ことを趣旨・目的として、本学学生を対象に、読書感想文コンクールを実施しています。

今年で3回目となる実施に、10名の学生の方から応募がありました。応募してくれた皆さん、ありがとうございました。LIBRARY NEWS 特別号ではご応募いただいた中で、今回受賞された6作品を紹介いたします。

第3回読書感想文コンクール 表彰式

平成27年9月24日（木）



村川図書館長から、応募者の皆さんとお祝いに来てくれた学生の皆さんにお礼の言葉をいただきました。

その後、それぞれの作品の講評をいただきました。どの作品も大変すばらしく、近年読書離れが進んでいる中、大変喜ばしいと話されました。(p.10参考)



村川図書館長より表彰状が手渡されました。



受賞式に来てくれた友人の皆さん、村川館長、高ノ原先生



第3回読書感想文コンクール課題図書



書名	著者名	出版社・出版年・価格
奇跡の脳	ジル・ホルト・テイラー	新潮社/2009年/1700円
手のひらから広がる未来	荒美有紀	朝日新聞出版/2015年/1296円
重い障害を生きるということ	高谷清	岩波書店/2011年/777円
こんな夜更けにバナナかよ	渡辺一史	北海道新聞社/2003年/1800円
身体感覚を取り戻す	斎藤孝	日本放送出版協会/2000年/970円
脳を鍛える	立花隆	新潮社/2000年/1600円
夢よ、僕より速く走れ	神保康広	海拓舎/2000年/1470円
だいじょうぶ3組	乙武洋匡	講談社/2010年/600円

-最優秀賞-

言語聴覚学専攻 4年 中村 優 さん



奇跡の脳

「奇跡の脳」というタイトルから脳出血や脳梗塞から1年や2年といった短い期間で元の脳に戻る話だと推測していたが、そうではなかった。37歳という若さで脳卒中を患い、脳の広い範囲が血の海になったにも拘らず、8年もの大変なりハビリを乗り越え、ようやく病前と同じような生活を送っているという実体験を書いている本であった。

この本を読み進めていく中で私が一番学んだことは、言語聴覚士として患者様の「ことば」を粘り強く待つことである。本の中では失語症というワードは出てこなかったが、症状から考えると失語症といえると思う。この本には失語症者の感じ方や気持ち、考えが多く書かれており、想像することで失語症者の脳内を体感することが出来た。そして、私が今までの実習で失語症の方々に行ってきた訓練を思い返したとき、反省すべき点が見つかった。1つ目は患者様からの反応がない時に「ヒント」と称して多くの刺激を与えていたこと。2つ目は大きな声で同じことを繰り返し言っていたこと。他にも良かれと思いやっていたことが、患者様の回復を妨げていたかもしれない、と思うと胸が痛む。患者様の中には、ここで挙げた2つの事柄が有効に働くこともある。しかし、作者のように外部からの音声入力を処理することに時間を要する方もたくさんいる。その方たちが一生懸命処理している間、私はじっと耐え、黙って待たなければならなかった。「脳は使わないと良くならない」と書かれているように、リハビリを行う根本はここにあることを改めて学んだ。そして、課題に対する正解を得ることがゴールではなく、時間を要してでも脳を全力で活動させるように導くことが言語聴覚士の役割であることを学んだ。

もう一つ、この本から意外なことを学んだ。それは、誰しもが一命をとりとめた時点で「病前と同じくらい回復したい」という想いがあると思っていた。損傷の程度によって違いはあると思うが、『病前でできていたこと』が何か分かっていないと「回復」という想いすら起こらない。言われてみればその通りだが、そのような考えをしたことがなかったので衝撃を受けた。出来ないことが当たり前なので、訓練への意欲がなく、訓練が本当に必要なのかと疑問に思うこともあるそうだ。ここで重要なのは周りの支えだと思う。口で「頑張れ、頑張れ」と言うだけではなく、手を握ったり、肩に手を置いたりして患者様自身を優しく包み込み、愛情を送ることにより「伝えたい」という想いが芽生えてくると考えた。私は患者様が「伝えたい」と思う気持ちが言語療法の上でとても大切だと思っている。「伝えたい」という想いさえあれば、それが受け手に伝わると信じているからだ。周囲の方々と共に患者様に「伝えたい」という想いを芽生えさせ、その後も関わっていくのは他でもない言語聴覚士である。来年から私の職種となる言語聴覚士の仕事は本当に素晴らしいものだ改めて感じた。

図書館長賞

作業療法学専攻 2年 森口 優海 さん

夢よ、僕より速く走れ



私はスポーツについてよく知らない。体育の授業でやった程度だ。そんな私が読書感想文を書くにあたりこの本を選んだのは、表紙を開いて見えた煽り文が目にとまったからである。夢を追いかけ、掴み、さらに大きな夢を追いかけるというその文は、「僕は夢を食べて生きていく」という言葉で締めくくられていた。私は今でこそ作業療法士となるべく大学に通っているが、その夢を見つけるのに長い時間を費やした。自分のやりたい夢が見つからず、随分と悩んだ。そんな私だから夢をひたすら追いかけるこの本に惹かれたのだろう。

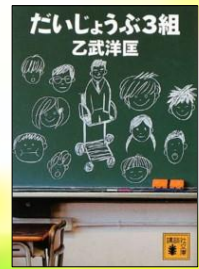
この本は車椅子バスケットボール選手である神保康広さんの話である。彼はバイクでの事故により、車椅子での生活をするようになる。事故の際に彼は「俺の足がない」と叫んでいた。周りが足はついていると言っても、彼にはもう自分の足の感覚を認識できなかった。私は痛みも感じないということに驚いたが、よく考えればそれは当たり前である。しかし、そんなにすぐに感覚とは消えるものなのかと思ってしまった。それ程に一瞬のことだった。彼は自分が障害者であると認めることが嫌で、車椅子を作ることさえ拒んでいた。そんな彼が今、車椅子に乗ってバスケットボールに打ち込んでいる。そこに至るまでの苦難は私には計り知れないものだろう。しかし本を読んでいると、どんなに大変だったかということよりも、どれだけの人に支えられてきたかという感謝の気持ちが伝わってくる。この本は神保さんの出会いと前進について綴られたものだと思う。そしてその出会いは、足の自由を失ったからこそ生まれたものであった。章の合間には当時の彼を知る人たちからのメッセージが書かれていた。中でも目についたのが「いけるとこまで走って行ってほしい」という友人からのメッセージである。神保さんは車椅子に乗っているが、それでも走っているのだと感じられた。多くの出会いは彼を変え、そして彼は自分を「幸せな人間だ」と評するのである。

神保さんは友人の言葉でアメリカに行く決意を固めた。「できない理由を並べるのではなく、どうすればできるかを考えろ」というその訓えは、私にとっても衝撃的なものだった。私は本を読むとき「私ならどうなるだろう、この場にいたらどうするだろう」と考える。しかしそれはあくまで想像で、答えを出しても実際はそのように動けないのだろう。それどころか、想像の中でさえ動き方が分からないことも多い。その度「だって」と、できない理由を思い浮かべるのである。しかしそれでは何もできないままだ。「だから」どうすべきか、その先を考えなければ前には進めない。私は今でも自分の夢に不安を持っている。「自分にできるのか」と考えてしまうのである。しかしそれならできるようになるために動かなければならない。私の周りには同じ夢を追う同士がいる。彼らと支えあいながら前へ進んでいこう。

—優秀賞—

作業療法学専攻 1年 中川 舞香 さん

だいじょうぶ3組



私が「だいじょうぶ3組」を選んだ理由は、タイトルから強い自信と安心感を感じ、興味を持ったからである。

「だいじょうぶ3組」は、松浦西小学校の五年三組の担任、赤尾慎之介という生まれつき四肢が与えられなかった新人教師と、赤尾と小学校からの同級生である白石優作という介助員と、28人の生徒が葛藤や困難を乗り越え共に成長していく話である。

私は、「生まれつき四肢がないとはどういうことか」、「〈普通〉とはどういうことなのか」など今まで深く考えたことがないことを考えさせられた。四肢がないということは普段の生活がどれだけ大変なものなのか容易く想像できなかった。なぜなら、何をするにも手を使ったり足を使ったりと当たり前のように生活しているからだ。だが、この赤尾先生は右腕と頬の間にスプーンを器用に挟み給食を食べたり、パソコンを使う際には自分自身の短い腕で打つことができたりと、周りから見たら〈普通出来ないのではないか〉ということも努力することで乗り越えることが出来る強さを持っていた。もちろん、牛乳ビンの蓋を開けられないことや、長い距離を泳げないという〈出来ないこと〉もある。だが、赤尾先生が〈乗り越えよう〉という強さを持っているのは白石先生や生徒達などの周りの協力があるからなのだと感じた。

では、世間が思う〈普通〉とは一体何なのだろうか。国語辞典で調べてみると、「当たり前なこと」「変わっていないこと」などが出てきた。四肢がないということは確かに当たり前では無いのかもしれない。だが、手足が無ければ「あれが出来ない」「これが出来ない」といった世間の言う〈普通〉に縛られていたら何も出来なくなると感じた。私も、料理をしないことで母から「普段何もしていないから普通に考えて何も作れないでしょう？」という言葉を受けた。これを機に母にとっての〈普通の考え〉から抜け出したいと考え、インターネットで色々な料理を調べてみたり、母の料理している姿を見ることで今では三品ほど作れるようになった。母の〈普通〉の中に留まったままなら本当に何も出来ないままであった。だから、「普通はこうだ」「当たり前だから」という考え方を払拭し、物事をもう一度違う視点から見ることの大切さをこの赤尾先生から学んだ。

この本を読んだことで〈普通の考え方〉が良い時にも悪い時にも考えられることを初めて知ることが出来た。私は将来、作業療法士というリハビリテーションの仕事を目指して大学に通っている。だから、患者さんにとってより良い方法を目指していく上で〈普通という考えに縛られていないか〉ということを入念に入れることがとても大切なことだと強く感じた。

-優秀賞-

作業療法学専攻 1年 末永 幸子 さん



OHANA(家族): “奇跡の明日”を信じて

この本は、難病に苦しむ夫(千秋さん)、娘(紅梨(クリ)ちゃん)と共に暮らす妻(淳子さん)が執筆した本だ。基本的に紅梨ちゃんが成長していく様子が中心で書かれている。私がこの本に出会ったのは中学生の頃だった。その頃にこの本を読もうと思った理由は3人家族のイラストが入った鮮やかな表紙に目を引かれたから、とか、本の中をパラパラと開いてみて読みやすそうだったから、といういかにも子供らしい理由だった。しかし、それから5年以上経ち、今私は作業療法士という医療関係の職業に就くための勉強をしている。最近、偶然自分の部屋の本棚を整理している時にこの本を久々に見つけ、今、医療従事者を目指す上で何か新しく掴めるものがあるのではと思い、再度読んでみようと思った。

先ほども述べたように、この本に出てくる3人家族のうちの筆者以外の2人は難病にかかっている。疾患名は脊髄小脳変性症である。その症状は、少しずつ身体の機能が失われ、歩くことや話すこと、食べることが困難になり、最終的に寝たきりとなり、呼吸運動の停止や合併症で死に至る恐ろしい病気だ。この病気にはいくつかのタイプがあり、その多くが知的能力は変わらないにもかかわらず、2人のタイプである歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症(DRPLA)は痴呆や人格変化をもたらすそうだ。若年では癲癇もみられる。もしも自分の大切な家族がその病気によって毎日少しずつ色々なことができなくなり、最後にはいなくなってしまうたら。そう自分の家族に置き換えて考えてみると、胸が重くなる。

クリちゃんは生まれた瞬間からDRPLAにかかっていると分かっていたわけではなく、筆者は最初LD(学習障害)を疑っていた。なぜなら知的・身体的な面で普通の子とは“何か”が違っていただけからだ。しかし、5歳の時に幼稚園の先生の勧めで検査をしたところ、脳波に異常があり将来癲癇を起こす可能性があると言われた。その後クリちゃんは癲癇を起こすようになる。そしてDRPLAの診断が下った。同じように千秋さんにも診断が下り、さらに苦しい毎日が始まっていく。特にDRPLAの厄介なところは人格変化をもたらすことだと思った。今まで関わってきた家族と全く別人のように感じるくらい的人格変化は精神的にとっても辛いものに違いない。しかしその現実から目を背けず共に必死に病気と闘いながら前向きに暮らす3人に心を打たれた。

この本を改めて読み、今自分がどれほど恵まれているのかがよく分かった。世の中には自分が想像もできないような苦しみを抱えている人がいる。小さなことでめげてはいられない。これからは今まで以上に力強く生きていこうと思えた。



-佳作-

作業療法学専攻 1年 北山 千晶 さん

こんな夜更けにバナナかよ



私がこの本を選んだ理由は、タイトルと表紙に惹かれたからだ。筋ジストロフィーの鹿野靖明さんとボランティアたちの話でありながら、変なタイトルだと思った。同時に内容が気になった。私はタイトルの意味を解明する探検家の気分で本を読み進めていった。

主人公は鹿野靖明さん。四十歳。進行性筋ジストロフィーという病気を患っている。それは全身の筋肉が徐々に衰えていく難病である。治療法はいまだ解明されていない。現在、鹿野さんが一人で出来ることは、両手の指がほんの少し動くといったことだけで、寝たきりの生活を送っている、一種一級の重度の身体障がい者である。すべてのことに人の手を借りなければ生きていけない。そしてさらに大きな問題があった。

三十五歳のとき、呼吸筋の衰えによって自発呼吸が困難となり、手術で「人工呼吸器」という機械を装着した。筋ジストロフィーという病気が恐ろしいのは、腕や脚、首といった筋肉だけでなく、内臓の筋肉をも徐々に蝕んでいくことだ。以来、二十四時間、誰かが必ず付き添って、呼吸器や気管内にたまる痰を吸引しなければ痰をのどに詰まらせ窒息死させてしまう。そういったボランティアの人たちと二人三脚で生きていく鹿野さんの話だ。

本文の中で、「障害」の中身が具体的に見えてくることで、無駄な気遣いは不要であり、「普通の接し方」や「心の準備」もできくと書かれている。障害の具体的な中身は本で調べたりして理解可能だ。しかし、その理解のみで障がい者に対して健常者と同等に接することができるのかと考えると、私は遠慮してしまい難しいと考える。障がい者に対して、この人は自分よりも不幸だから、可哀そうだからといった「同情」や「弱い立場である」という固定概念が付きまとう。そう思いつつ、また本を読み進めていった。

すると、「健常者対障害者」という関係から「個人対個人」の関係に踏み込むことで初めて見えてくるものがある。逆に言えば、単に不幸で可哀そうな障がい者に「奉仕・献身」にしている限りでは、健常者と障害者はうまくつながることができないはずだ。という言葉から私は次のことを学ぶことができた。

障がい者だからと言って、遠慮は必要ない。遠慮をせず、障害への配慮を心がける。そして、簡単なようで難しい「障がい者を一人の人として見る」ということが、いづれか当たり前に出来るようになりたい。私がこれから多くの障害や悩みを持った人たちと出会っていくなかで、この本は基本ともいえる心構えや普通に接することの大切さを学ぶことができた。私は一度だけしか読んではいないが、機会があれば、二度三度読みたいと思う。そうすることでまた違う新しい発見や学びが得られるのではないか、と思わせるような本だった。

ー佳作ー

言語聴覚学専攻 1年 牛造 香琳 さん

重い障害を生きるということ



療法士としての視野を広げるために新しく本を読みたいと思っていました。同じ時期に読書感想文コンクールがあったので、課題図書を見ていたところ、この本のタイトルに目を惹かれ、“重い障害を生きるということ”とは、どのようなことだろうと疑問に思い、この本を読むことにしました。

この本は、重症心身障害者について書かれていて、その人達の状態や生活を送っていく中で生じる困難、人間や社会にとってどのような存在なのかということが書かれています。その中で特に私が印象に残っているところは、重度肢体不自由があり知的障害のない、26年間寝たきりで生活を送っている男性の話です。彼は施設での行事や家庭への帰省を楽しみにしていますが、楽しみの日が近づくとうれしく高熱がでるため参加できないということを繰り返していました。それから期待や興奮が大きくならないように気を付けることで高熱がでることはありませんでした。ときどき筋緊張が強くなることで痛みに襲われることがあり、いつもなら看護師に姿勢を変えてもらい、それでも改善しないときは注射を使いますが、我慢強い彼は声を出さずに耐えているため、気を付けないと「静かなる戦い」に気づかないこともあります。土曜日のある日、彼の様子が急変したため、心腔内に何本もの注射を打ち心臓マッサージを行い、自発呼吸をとりもどしましたが意識が回復することはなく、二日後に息を引き取りました。

彼のことが書かれていた部分はわずか8頁しかありませんでしたが、まるで自分が現場にいあわせたかのように彼の姿をイメージすることができました。彼の必死に生きようとしている姿に胸を打たれ、亡くなったという事実を知ったときは悲しみがこみ上げてきました。

重い障害を抱える彼らは環境の変化など、精神状態が乱れることによって、身体的な不調に繋がることがあり、過度な場合には死に至ることもあります。彼らにとって生きることが気持ちの良いたる環境を作るには、自分の意思を伝えることができない彼らの気持ちをいかにくみ取ることができるかということだと思います。また、医療を行うことに慣れ知識を積むと、説明がつかないことは切り捨て、効率を考えるようになってしまいがちになります。その結果、施設の子供達は夜に外に出ることを制限されているためお月さまを見たことがない、検便をするときに男の子も女の子も下着を下ろさせて肛門から直接便を採取するなど、その人のために行っている医療が生活や人間らしさを奪ってしまう可能性があると感じました。業務を的確にこなすことと合わせ、その人について理解して考えることが大切だと思いました。

大学生という時間のあるこの時期に、様々な知識や多様な考え方を身につけるためにも、これからも沢山本を読んでいきたいと思いました。

村川図書館長から講評

去る9月11日を〆切日として本学読書感想文コンクールが行われ、今年度は10編の応募があり、最優秀賞、図書館長賞、優秀賞等の選考が行われました。

最優秀賞には、ST4年生中村優さんの『奇跡の脳』（ジル・ボルト・テイラー著／新潮社）の感想文が選ばれ、臨床実習の経験をふまえて、言葉を失った方への接し方を通して主人公の障害を理解しようとする熱意が伝わって来るものでした。リハビリテーションの視点が深められた大変良い感想文でありました。

図書館長賞には、OT2年生森口優海さんの『夢よ、僕より速く走れ』（神保康広著／海拓舎）の感想文が選ばれ、自分の感情が文体に現れて、その思いが素直に述べられ、またスピード感のある文章で描かれていました。なお、森口さんは昨年に続き2年連続の入賞となりました。

このほか、**優秀賞**にOT1年生中川舞香さんと、同じくOT1年生末永幸子さんが入選し、佳作としてOT1年生北山千晶さんと、ST1年生牛造香琳さんの感想文が選ばれました。入選された方々には、表彰状とマイレージ（ポイント）が贈られました。

今回は、昨年よりも数多い応募が得られました。熱意のこもった感想文が多かったこと、また1年生からの応募が多く今後に期待がもてたことなどが印象に残りました。今後、「読書の秋」あるいは春休み・夏休み期間を活用して、書籍に親しむ習慣を身につけ、知識をひろげ、教養を深めてほしいと考えております（図書館長）。

第3回読書感想文コンクール 審査委員の先生方



村川図書館長



岡田先生



馬屋原先生



武井先生



高ノ原先生



石川先生



小俣先生



ありがとうございました



編集後記

後期授業が始まりました。図書館は夜遅くまで、国家試験の勉強や、レポート作成・実習のため資料収集に励んでいる学生さんでにぎわっています。医療系大学の学生さんは、忙しくてなかなか読書の時間が持たないのではないかと心配していましたが、今回の読書感想文コンクールに10名の学生さんから応募がありました。また、課題図書の出借数は大幅に増えました。受賞作はどれも力作です。今号をぜひ手にとっていただき、みなさんの大学生活の中で読書が身近なものになることを願っています。